

押川春浪『海島探險 塔中の怪』における娯楽への意識

——「海底軍艦」を相対化する物語として——

武田 悠 希

はじめに

『海島探險 塔中の怪』(文武堂、明治三十四年十月)¹⁾の主な登場人物は、語り手である好奇心旺盛な帝大生「武田勝雄」、その親友で世界一の大探偵「長岡武太郎(長岡大探偵)」、「武田」の下宿先の令嬢「雪子姫」、世界を恐怖に陥れた海賊集団「九人の魔賊」である。

大筋は、九人の魔賊によって、「黒面島」(オーストラリア州)に連れ去られた雪子姫を、武田と長岡大探偵が救い出し、魔賊達を退治するというものである。途中には、数々の不思議現象が示され、それに関する探偵結果を大探偵が説明する。たとえば、島で目撃した空中の「大魔影」を、大探偵は靈気楼の原理で説く。

以上のような概要を持つ「塔中の怪」という作品は、詳細は後述するが、執筆時期と内容において、春浪作品の評価軸を相対化する可能性を持っている。

日露戦争期を中心に人気を集めた作家、押川春浪は、明治三十三年にデビュー作『海島探險 海底軍艦』(文武堂)を刊行した。海賊の被害に遭った少年の冒険および、海賊と日本の秘密潜水艇との戦いを描いて人気を博し、二年後に続編が刊行されて以降シリーズ化する。

「少年時代中学時代」に春浪の諸作を最も愛読したと回想する柳田泉は、特に「海底軍艦」シリーズに心酔したと述懐する²⁾。加えて「日露戦争前後の」、「日本といふ空気を、この春浪の小説程よく示してゐるものはない」と指摘する³⁾。春浪作品が明治期の青少年に多く受け入れられたことは重要である。その同時代における位置づけを見極めることは、明治文学の様相の多面的な把握に大きく寄与するが、それと同時に春浪作品のイメージには、当時の「日本といふ空気」を最もよく表すという側面がある。

その後の春浪作品の研究は、こうした側面を持つ作品をいかに評価することができるかという問題に取り組みながらも、なかなか整理をつけられないでいる。

主な流れとして次の二点が指摘できる。同時代状況との結びつきを指摘する論の流れと、娯楽要素に着目して評価する論の流れである。

前者は、先述した、当時の日本の鬱屈気を表するという印象を補強するものである。昭和初期の柳田泉は「海底軍艦」シリーズの理想は、明治二十年前後の政治小説の理想と同じであったと指摘する。戦時中、滑川道夫は、「少国民の遠い「夢」を語ったと評価する。滑川の論は、時代の制約の中で意味を持つ論であったが、この見解は以降にも引き継がれる。

たとえば、『近代文学研究叢書』は、春浪が、「時代的要求を身に体して文壇に登場した」と指摘し、「日清、日露戦前後の日本青年の一面をも伝えている」と述べ、菅忠道は、日本の児童文学史の中で春浪に触れ、「封建的・軍事的帝国主義の典型」であったとする。

これらの研究における問題点の一つは、作品に描かれたものは同時代状況を背景とした作者の心情や理想そのものであるという認識が、創作意図と重ねて考えられてきた点にあり、その作品群は一まとめに論じられる傾向にあった。

以上の流れの中で、池田浩土は、軍事小説や政治小説の先駆とといった論を乗り越えるべく、読者の人気を得たのは読者の希求を予感的に感知したからであると論じる。しかし、『海底軍艦』にはじまるかれの諸作品のように、シリーズ全体の分析がまとめられ、作家全体の問題に敷衍される。また、春浪作品をSF小説

の原型に据え、理想を「戦争と侵略のイデオロギーと直結」させるとしかなかつたことがその「隘路」となったと述べる。

池田の論も、作品は春浪の考えがそのまま反映したものであるという認識が前提にある。そのため、その再評価を試みながらも、「日本SF小説の隘路」という形でまとめざるをえなくなっている。理想の表明を自明とするのではなく、創作意図を考える必要性が見えてくる。

娯楽要素に着目した論では、まず、二上洋一や横田順彌・會津信吾らによるSF小説として評価する論が挙げられる。また、私市保彦は、SF小説と魔術的ファンタジーとの混交に、春浪作品の広がりの可能性を見出している。

続けて、探偵小説的趣向を評価する論がある。春浪の作に探偵小説の要素があることは、早くに江戸川乱歩が指摘している。中島河太郎と伊藤秀雄は、探偵小説史の一部として触れ評価するが、両者とも、その探偵趣味の未熟さと粗雑さに言及している。

これらの娯楽要素を指摘する論に共通する問題は、なぜ春浪がそうした要素を取り入れたのかが分析されていない点にある。創作意識まで踏み込んでいくことが課題といえる。

以上の流れからは、同時代状況と結びついた政治的側面と、SFや探偵小説といった娯楽要素のどちらもが春浪作品の性質であることが窺えよう。同時代における春浪作品の位置を見極めるということは、なぜそうした政治性と娯楽性が同時に成立し得たのかを問う行為でもある。そのためには、個々の作品を同時代に戻

すことによつて、春浪の創作意図や意識を汲み取つていく作業が有用である。

以上をふまえて、本稿では、代表作とされる「海底軍艦」と同時期に考案執筆されていた「塔中の怪」を分析対象に据えて、春浪の創作意識に迫る。「塔中の怪」の分析を通じて、従来の春浪作品の評価軸の相対化を試みたい。

一章 探偵小説の型

吉井勇の回想に、「塔中の怪」が「海国少年」に連載されていたという証言がある。⁽¹⁵⁾このことはすでに横田順彌・會津信吾が指摘している。⁽¹⁶⁾

「塔中の怪」の初出は、「黒面島」という題で「海国少年」三卷十一号（明治三十二年十一月）から四卷五号（翌年五月）まで「残月生」により連載された。四卷四号（明治三十三年四月）に、「押川残月生」の「日本書生の悪因縁」という論説があることから、「残月生」は春浪と特定できる。最後に連載が確認できる四卷五号で「黒面島」は未完である。

四卷八号（明治三十三年八月）「一口投書」欄に、「黒面島はあれざりですが続々掲載せられたし（釜石天遊生）」など読者の声が寄せられている。対して「記者」は「残月生差問の爲め休掲せしが其後請ふて続稿せしむる様取計中なり（記者）」と対応する。

ところで、「黒面島」が休載となつている明治三十三年の十一月には「海底軍艦」が刊行される。「塔中の怪」はその翌年の刊行となる。「海国少年」四卷八号に「残月生差問の爲め休掲せし」とあつた「差問」とは、「海底軍艦」執筆のことを指していたのであろう。「塔中の怪」は、春浪の代表作とされる「海底軍艦」の制作時期を、前後にまたいで考案執筆、出版された作品であつた。

「塔中の怪」と初出「黒面島」は、分量に差はあるが、設定や展開は、ほぼ同じである。

初出のあらすじは以下の通りである。ある日、「武田賤男」の叔父である水島侯爵の一人娘「綾子」が「九人の黒面鬼」に誘拐される。優れた探偵である「長岡武太郎」は、綾子がオーストラリアの黒面島の黒面塔に連れ去られたことを突き止める。島で長岡と合流した武田は「秘密の玉」を託され、二人は綾子を救うために塔へ乗り込むが、黒面鬼らに捕えられ、地獄穴に閉じ込められる。ここで初出「黒面島」は休載に入る。

「塔中の怪」について伊藤秀雄は、「探偵小説的趣向に富んでいる」と指摘するが、同時に「粗雑さも目立つ」と述べ、「要するに春浪は、冒険小説を書いているのであつて、探偵趣味は冒険に一層の魅力を添える景物としての役を与えているに過ぎない」とする。⁽¹⁸⁾

横田順彌・會津信吾も、探偵小説的趣向を指摘するが、注目すべきは、「海底軍艦」とは異なり、ミステリーの趣向に富んだS

「Fふう冒険小説」と特徴を述べている点である。

「海底軍艦」と同時期の作品でありながら、探偵小説的特徴が顕著に見られるという点で、「海底軍艦」とは異なる特徴を持つ作品といえる。

作者自身は、本作の特徴をどのように捉えていたのか。それを知る手がかりが、初出「黒面島」に見出せる。黒面島で合流した際、「長岡探偵」と「武田」は空中に現れた「怪物」(「大魔影」)を目撃する。これについて「武田」は次のように読者に語りかける。

此怪物こそ実に本篇の骨子で(略)これからだん／＼此小説を読みゆき玉ふに従つて諸君は知らず／＼の間に此怪物の如何なるものなるやを会得し玉ふべし

(「黒面島」(三)(「海国少年」三卷十二号、明治三十二年十二月))

「怪物」に驚く「武田」は「一体あれは何だと」と問うが、「長岡」は「夫れは問ひ玉ふな、今話しては却て為にならぬ、其後解る事がある」とまだその謎を明かさない。

「海国少年」四卷一号(明治三十三年一月)掲載の「黒面島」第五、六回末部にある「残月生申す」と始まる付言には、「原因結果を探れば左程怪しむに足らぬ」、「此後に到りては、あと合点のゆき玉ふ事のあるべく」とあつて、作品に散りばめられた不思議な現象は、後段で合理的に明かしていくつもりであるという意

が読者に示されている。その不思議現象の代表が「怪物」(「大魔影」)であるが、単にその不思議だけでなく、謎解きの過程に重きがあり、不思議現象の「原因結果」を「探偵」が合理的に明かしていくという探偵小説の型が、ここでは作品の「骨子」として意識される。伊藤が指摘するような「景物としての役」にすぎないものでは決してなかったことが了解されよう。

その「骨子」は、結局初出では記されずに終る。初出で果たされなかった謎の解明は、単行本「塔中の怪」にて、第十回から十五回までの長い「講釈」(一二〇頁)として成し遂げられた。

では、「黒面島」と「塔中の怪」が採用した探偵小説の型とは、何に拠るものであったか。

読み進むに従つて謎が明らかになる構成は、それ以前の探偵小説にも共通するものである。しかし、ここで注目したいのは、探偵と語り手の役割と関係性である。

初出でも単行本でも、物語は「私」こと「武田」によつて語られる。「武田」は「長岡大探偵」を「本篇の主人公となるべき」(五五頁)として位置づける。主人公は「長岡大探偵」で、物語全体の語り手は「武田」という各々の役割が確認される。

二人が「空中の魔影」(七四頁)を目撃したところから「長岡大探偵」による探偵結果の説明が始まる。先述したように、これは初出に欠けていた部分である。その内容は、昔黒面島を支配した「銅爺王」、塔の構造、「星の冠の玉」の発見についてと続き、

その後第十回から十五回にかけて「魔影」は「銅爺王」の仕業である、「武田」を聞き手として説明される。「武田」が「空中の幻影の正体は何物だ」と問うと、「さればさ（略）空中の幻影の本体は、たしかに一個の魔像である」と探偵の説明が始まるという具合である（七九頁）。

明治三十二年に、南陽外史（水田南陽）によってコナン・ドイル作『シャーロック・ホームズの冒険』に収められた十二篇の全訳が「中央新聞」に連載されているが、「不思議の探偵」と題されたこの翻訳には、原作同様推理を語り聞かせる探偵と聞き手の助手が登場する。

この探偵と聞き手の助手の関係について、川戸道昭は、エドガー・アラン・ポーの手になる名探偵デューパンを日本に初めて紹介した饗庭篁村訳「ルーモルグの人殺し」と、ドイルの「ホームズの探偵小説にも共通してみられる」点を、「殺人にいたるまでの経緯を、語り手の「余」に詳細に話して聞かせるという設定もその一つである」と指摘している。

明治三十二年七月から十一月まで掲載された「不思議の探偵」は、ちょうど初出「黒面島」が始まる直前まで連載されていたということになる。时期的にも、「長岡大探偵」が探偵結果を物語の語り手「武田」に説明して聞かせるという構図を見ても、春浪が、探偵小説の型として、これを参考としていた可能性は高い。

ここでさらに、「長岡大探偵」の言動の特徴を捉えたと、「不思議の探偵」に描かれる「大探偵」の言動と近似する。「長岡大探

偵」は、次のように星の冠の玉を「武田」に託す。

たゞ、僕の指揮するまゝに、それを使用すればよいのだ。」

『君の指揮に従つて——』と私は今一度星の玉を凝視した。

『左様、僕の指揮に従つて——』（二三四頁）

また、敵の隠れ家へ乗り込む際、「長岡大探偵」は「武田」に三つの約束を立てさせる。「一挙一動すべて大探偵の命令に随ふべき事」、「黒面塔に近づく迄の間成るべく静謐に、余り身動きなどはせぬ事」、「恐怖の叫声などを発してはならぬとの事」の三つである（一四二—三頁）。このように、「長岡大探偵」は、様々な指示を「武田」に出して守らせる。

「不思議の探偵」での「大探偵」はどうか。たとえば次にあげる二つの場面では、「大探偵」が細かい指示を依頼人や助手の「医学士」にたたみかけるように出している。

『かめさん／＼貴嬢はネー、一部始終拙者の云ふ通りに、守つて下さらなけりやいけません（略）』『随分切迫した事件ですからネー、貴嬢が拙者の云ふ通り守つて下されなけりや（略）』『妾は誓つて貴下のお指図に背きません（略）私もかめ嬢も唯呆れて』

『医学士少しでも音を為せると、忽ち折角の計画が無益にな

るから、如何ぞ能く心を付けて呉れ玉へ『宜しい承知しました』此室の燈はもう消して置く方が好い（略）此室に燈のある事が知れるから『そうですネー』椅子に凭かゝる位は好いが、寝入つてはいけないよ、寝入ると君の生命が危ない（略）短銃を構へて、其中央の椅子にかけて居玉へ』私は云ひ付けられた儘に短銃を構へて。

「黒面島」が、直前まで連載されていた「不思議の探偵」を探偵小説の型の素材としていた様子が窺えよう。

川戸道昭は、探偵小説流行の機運を作つた黒岩涙香が好んで訳し、「怪奇性・ホラー性のほうに中心がおかれ」ていたガポリオ、ポアゴベなどの「センセイション・ノヴェル」と比較して、ドイルの探偵小説の特徴を、「科学的実証精神にもとづく本格推理の導入というをおいてほかにない」とする。以上をふまえて、水田南陽訳「不思議の探偵」が、推理部分については忠実な翻訳となつてゐることを説明し、その本格推理物としての性格を指摘している。

単行本「塔中の怪」で、探偵の説明は、確かに科学的説明として記され、例えば、空中の魔影は、蜃気楼の作用と説かれる。しかし、江戸川乱歩が探偵小説の系譜としながら、怪奇小説と読んでいることからわかるように、内容は決して本格物ではなかつた。

たとえば、初出、単行本ともに、「武田」が「長岡」とはぐれ

て一人である部屋に侵入する場面には、不思議な部屋が描写されている。

不思議な事には此室の床板はいづれも平面ではない、丁度オルガンの様に歩む度に一枚々々沈んで、また浮び出る様は、それは／＼奇妙だ（略）何れ深い仕組があるのだらう（黒面島）（五）（『海国少年』四巻一号、明治三十三年一月）

このあと、不思議な花と胡蝶の描写が続く。「何れ深い仕組があるのだらう」という記述から、いづれこの不思議にも何らかの説明を与えようとしていた目論見は見えるが、単行本では、そうした記述は削られ、不思議な部屋の描写のみが描かれている。単行本化の際にあえて不思議な部屋の描写を残した点からは、科学的妥当性よりも、要素の新奇性に重点を置く様子が窺える。これは、科学的説明でも見られ、たとえば星の冠の玉によつて人が催眠状態に陥ることを、神経の麻痺として説明するのであるが、それを「世にも不思議なる化学の作用」、「未だ知られざる天地間の不思議」と記している（三一―九頁）。

以上の点から、同時代の文学状況において、新しい探偵小説の体裁を取り入れながら、従来のものとの差異化を図るといふ小説創作上の工夫をなしていた様子が窺える。

これは一体どのような意図のもとに行われたのか。本文の中には初出、単行本ともに読者への意識が散りばめられている。それ

が特に表されている箇所を引く。

読者諸君、諸君も定めしがつかりとせられた事であらう、大血戦が始まるかと思つて居たのに（略）然し震天動地の大波瀾は美に是から起るのである（一七二頁）

「がつかり」という表現から、読者を楽しませることに重点を置いている様子が窺える。

この意識は、一年後作品の「面白」という形で表現される。明治三十五年刊行の『英雄武侠の日本』（小説）「はしがき」には、「文学上の価値が無しと云はれても（略）面白きものは矢張面白きなり、如何にもして斯かる面白き小説を作らんと」と意図が示されている。

探偵小説が多くの読者を獲得したことについて、鄭漢生の「◎探偵小説と冒険小説と」（早稲田文学）明治二十六年三月）は次のように伝える。

多数の人の小説を好むや（略）尤も興味あるは聴く者をして「この先いかになるべきか」との念を発せしむるものに勝れるはなし（略）探偵小説は尤も此の分子に富み

探偵小説の型は、読者を楽しませるための大きな要素であった。

つまり、春浪は「海底軍艦」刊行の前年からその後にかけて、同時代文学の動向の中で、創作において読者を楽しませるための娯楽性を模索する姿勢をとっていた。彼の小説は単なる理想の発露として存在するわけではない。

ここで、読者への意識として提示されるのが、謎の原因結果のみへの興味ではないことに注意しなければならない。単行本化された際、長岡探偵による謎解きが、一部を残して物語の前半に集中的に行われるという構成とも関わる、伊藤秀雄が「粗雑さ」として表現し、「冒険そのものに一層興味があつた」とする点である。

二章 現実との対峙の中から

単行本「塔中の怪」の探偵小説的要素は前半部分に凝縮され、後半では、「武田」と「長岡大探偵」が危険を冒して敵と戦う展開が主として描かれる。この背景にはどのような状況と意図があるのか。

明治三十二年十一月九日の「読売新聞」朝刊四面に「女義太夫の弊害」という記事がある。「近頃女義太夫の流行甚しく（略）遊学生も多くハこれによりて浅ましき墮落の端緒を作る」と、女義太夫に入れあげて学資を使い込んでしまふなど、学生の墮落が説かれる。似たような記事はこの時期多数見られ、学生の墮落が目立ち、注目される様子を伝えている。このような学生のあり様

に当時の春浪も目を向けていた。

「黒面鳥」の掲載がある「海国少年」四巻四号（明治三十三年四月）に、「押川残月生」による「日本書生の悪因縁」という論説がある。これは学生の墮落について考えを述べたもので、ここで春浪は、当時の日本の学生には、欧米の学生には享有されている「清浄なる」娯楽や「学生的娯楽」が欠けていると論じている。春浪が東京専門学校を卒業するのは明治三十四年の七月のことであるので、この時点ではまだ春浪も学生の身分で、「過大の学業を強制せらるゝ」日本の学生には、「一の学生的悟楽場ゴラクバなく、「在るものは、銘酒店のみ、女義大夫のみ、玉突場のみ」という。また、「清浄」な娯楽のなればかりに、「男色の醜態決闘の流行等」に「迷道に陥る」と説き、「其心情又た憫む可き」と同情を寄せる。

では、「清浄」な「学生的娯楽」とその効果とはどのようなものか。春浪は「欧米」の「学生的の一大娯楽」について「清浄なる範囲に而も無限の自由と無限の趣味とを包有す」と述べ、その例として、「競馬」、「自転車」、「端艇」、野球や、「美妙的なる音楽会」「清楚なる茶話会」を挙げる。それらの「清楽」について、「欧米学生は実に斯の如くにして強壯なる身体と比較的健康なる品性とを保全」すると、「教育者」の言を紹介している。

欧米学生の持ち得る娯楽と、それにより「強壯」で「健全なる品性」を保全しているという様子は、この論説の冒頭の表現と呼応する。

万邦の間、頑迷支那の如き、貧弱朝鮮の如き、若くは暹羅シエムルマ等半野半開の国を除きて、恐らく我日本程其青年（略）学生を遇する事残忍刻薄なるものは蓋し稀なる

ここには「強壯」で「健全なる品性」が国家の盛衰、強弱と関わるという意識が透けて見える。しかし、この感覚は当時春浪だけが抱いたものではなかった。

明治三十二年九月十五日の「万朝報」に、「学生の生活」（流水）という論がある。「帝都十萬の学生」の「殺風景の生涯」と、学生生活の無味さを説いて始まるこの論でも、日本の学生と「泰西諸邦の学生」とが比較される。「泰西の学生の、善く食ひ、善く談じ、善く楽むに比すれば、興味何ぞ一に貧きや」と日本の学生の興味の貧しさを指摘し、特に、「渠等の下宿に在るや、一種淫微の事状に因て」、「墮落の種子を培養する」と説く。論末では、青年学生へ向けて、墮落した「薄志弱行の徒」では「大成を遂る」ことはできない、従って「懽娛に乏しき」からといって「元気を消耗する莫れ」と同情しつつ論ずる。

二つの論には、どちらも、欧米と比べて世界の中の日本を意識し、青年の「元気」や「品性」が、国家の行く末に関わるという認識が共通している。

「黒面塔」の語り手である大学生「武田賤男」は「学問は好かぬ方で兎角冒險な事や好奇ちうぎな事ばかりやる」人物で、「テニスの競技に耽たり」、「遠洋航海」を例年やる。「武田」には、「日本書

生の悪因縁」で同情を寄せられていた日本の学生の姿はない。むしろ、「強壯」で「健全なる品性」を保全する効果を持つ「清浄」な「学生的娯楽」を有し、それを楽しむ理想の姿が描かれている。「塔中の怪」でも、その基本的性質は同じである。

端艇競漕とか、野球競技とか、擊劍、柔道のやうな、壮快な運動遊戯が嗜好で困る、(略)夏は避暑よりは海島探險、秋は観月よりは猟銃(略)木曾山中の野猪狩だの、碓氷嶺の狼退治だのと暴れ廻るので(略)武田字は冒険だの(一九〇二〇頁)

冒険への好奇心が、健全な娯楽、あるいは「大成を遂るの器」として成りたてる「元氣」として立ち現れている。その娯楽は春浪自身の「学生的娯楽」への欲求の現れでもあった。

冒険への好奇心と健全な娯楽が結びついた背景には、海を越えるということが同時代に持っていた意味が媒介している。

初出「黒面島」と単行本「塔中の怪」における冒険とは、海を越えたオーストラリア洲の黒面島へ向けての旅であった。作品は島に至る船上の様子から始まる。

三千五百噸ばかりの大きな船が(略)塊太刺利亜の東の方の(略)離れ島の或小さい港口に錨を下ろした(「黒面島」(一))
(「海国少年」三卷十一号、明治三十二年十一月)

右は初出の冒頭である。単行本「塔中の怪」での冒頭は、次のように描かれる。

汽船が港に着く間際、蒸気機関の音、絶えてはひびき、響きでは絶え、其たびに号鐘カ、ンと鳴り(略)海風一陣又一陣(略)四千噸ばかりの巨大な汽船が(略)濠斯太刺利亜洲の南の端の(略)離れ島の、とある港灣に錨を投した(二二頁)

この後、長い船旅の末に陸上の景色を眺めたときの心地よさについて書かれる。

どちらも海を越えて来たことがその冒頭に意識的に配置され、特に単行本では、着港間際の汽船の情景が呼吸よく描かれ、読者を引きつけ、物語へ導入する効果を果たしている。

探偵小説の型の他に海を越えた冒険が重要な要素となっていることは、初出の掲載誌が「海国少年」であることからわかるように、海事思想の鼓吹と無関係ではなかった。

「海国少年」の「発行の辞」(一卷一号、明治三十年一月)は、「期する所」を「我天賦の海図を、真に海国的に發達せしめん(略)国民挙て海国民たるの覚悟を要す」と述べ、「海国民」に必要なものとして、「速大の精神」「剛毅の氣象」「堅忍の意思」「恢弘の量」「博愛の志想」を挙げる。この「海国民」の資質には、学生の墮落に関する文章にあった、青年の「元氣」や「品性」が

国の盛衰に関わるという感覚と同様のものが現前している。³¹⁾

同時代に共有された認識の中で、海を越えた冒険は健全な娯楽として立ち上がった。読み物として読者を楽しませるものを模索する中で海を越えた冒険を選択した過程においては、娯楽性への志向が国家意識に引き寄せられている。

「塔中の怪」の「はしがき」に目を向けると、「恋愛小説」ではないものとして、この「険奇小説」、「変幻奇怪」とする本作を著した旨が示される。

欧米諸国には（略）険奇小説も珍らしくはないが、日本に（略）類の無いのは恋愛小説万歳の世だからでありませう、然るに（略）此様な変幻奇怪なものを著はしました

本作が「恋愛小説」と対峙されるのはなぜか。それは、以上に見てきた同時代状況の中で「恋愛小説」と青少年の墮落が結びつけられていたことに由来する。³²⁾

「塔中の怪」が刊行される約三か月前、明治三十四年七月七日の「万朝報」に「恋愛文学の害毒」という論説が掲載される。雑誌店の書籍の大半であるという「古今の情話」、「恋愛の詩歌」を内容とする「乱倫醜猥の事を語るの小説」について、「恋愛文学なる者の弊害」を論じ、「染易きこと恰も素絲の如き青年少女を誘惑する」のに、「色情を以てし」、「青年少女の性行の日に墮落」することは「怪しむに足らざる」と指摘する。

当時の恋愛文学の流行がよくわかるが、それが青年少女の墮落を誘発すると述べている。

春浪は「武侯の日本」の「はしがき」で、「万朝報」に連載された「巖窟王」の愛読者となったと言及しているが、その連載期間は、明治三十四年三月から翌年六月までであるので、春浪が、この記事を読んでいた可能性はかなり高い。少なくとも、「塔中の怪」の「はしがき」における「恋愛小説万歳の世」が、学生や青少年の墮落と結びついていたことは、初出から単行本への異同、魔賊の手から救い出される華族令嬢の年齢の相違の中に見出せる。「黒面島」の綾子は、十六歳、「塔中の怪」の雪子は十三歳とある（二一頁）。しかしながら、この異同が、物語の筋立てや内容自体に及ぼす影響は特に見当たらない。なるべく恋愛小説的と読まれる可能性を無くそうとする意図が働いていた。

「黒面島」と「塔中の怪」には、どちらにも、長岡とはぐれて単身敵の隠れ家に乗り込んだ武田が、寝台に寝かされている綾子、あるいは雪子を発見する場面がある。初出は、綾子が武田の胸に抱き付いて泣き、その姿を見た武田が感慨にふけるという光景であるが、単行本では、雪子姫が急に顔を上げて父親の心配をするという光景に変更されている。武田と雪子との間に恋愛を予感させないための配慮が見られよう。雪子姫の年齢を十三歳とやや低年齢に設定したことも、読者に恋愛の予感を抱かせないための配慮であった。

また、単行本では武田勝雄の自己紹介がなされる場面に、

「下婢共おんこどもが、キヤークと狎戯おなじぶけ廻り」、「色の生白い書生輩しやうせいや、嘴くちばしの青い坊様ぼくちゃん」が、「教科書を投げ出して、騒ぎ出す」という「下宿」での学生の墮落した様子を示す一文（二〇頁）が追加され、武田と対比される。

このような異同の中に、学生あるいは青少年の腐敗と恋愛小説が結びついている認識が読み取れる。「はしがき」の「恋愛小説万歳の世」という語感には、日本の明日を担う学生たちや青年少女から「強壯」で「健全なる品性」を奪い、墮落させるものという感覚がこめられている。恋愛小説に背を向け、さらに距離をとっていく姿勢は、読み物としての娯楽性だけではない側面を示している。日本を担っていく青少年の「強壯」で「健全なる品性」を保つために必要な「娯楽」である。

おわりに

「塔中の怪」から、同時代のなかで娯楽性を模索し創作する春浪の姿が浮かび上がる。春浪は、当時の文学動向において読者を楽しませる作品を作るべく、創意工夫をなしていた。同時に、そういう志向のなかに見えてきたのは、単なる読み物としての面白さではなく、より現実に根差した娯楽の姿であった。娯楽性を志向することの重層的様相は、春浪の中で特に区別されていたものではない。政治性と娯楽要素とが同時に生起する所以があった。

海を越えた冒険が健全な娯楽という意味合いで作品の骨子として採用された結果、作品には特に国家意識と結びつく啓蒙的な力が付されることになるが、重要なのは、あくまで根底には娯楽性への意識があつたことであらう。一見自明なことがらであっても、そこを鑑みなければ、春浪の小説は単なる作者の理想の発露であるということに帰結してしまう。同時代状況のなかで小説の娯楽性を拾い上げる春浪の姿を見つめることの確かな意味はそこにある。

注

(1) 本稿における本文引用はすべて、『海島塔中の怪』（文芸堂蔵版、博文館・東京堂発兌、明治三十四年十月）に拠る。

(2) 柳田泉「大衆小説源流」（『新潮』昭和九年五月、『隨筆明治文学』（春秋社、昭和十三年八月）所収一九一―二頁）。

(3) 柳田泉「虚白堂文学雜記」（『我観』昭和十年七月、前掲所収六三―頁）。

(4) 柳田泉「物故文人独談議」（『伝記』昭和九年十一月、前掲所収六六―三頁）。

(5) 滑川道夫『小国民文学試論』（帝國教育会出版部、昭和十七年九月、復刻叢書・日本の児童文学理論（昭和六十二年十一月）二二―六頁）。

- (6) 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書 第十五卷』(昭和女子大学光華会、昭和三十五年六月)「押川春浪」三七、四二頁。
- (7) 菅忠道『日本の児童文学(増補改訂版)』(大月書店、昭和四十一年五月)、九一頁。
- (8) 池田浩士『大衆小説の世界と反世界』(現代書館、昭和五十八年十月)、一八九―一九〇、二〇〇―二〇六頁。
- (9) 二上洋一『少年小説の系譜』(幻影城、昭和五十三年二月)。
- (10) 横田順彌・會津信吾『扶男児押川春浪』(パンリサーチインスティテュート、昭和六十二年十二月)。
- (11) 私市保彦『魔術的ファンタジーとSFの交叉点―押川春浪『アラビアンナイト』・ヴェルヌー』(井上健編著『翻訳文学の視界―近現代日本文化の変容と翻訳』(思文閣出版、平成二十四年一月)。
- (12) 江戸川乱歩「活字と僕と―年少の読者に贈る」(『現代』昭和十一年十月号付録、『江戸川乱歩コレクションI 乱歩打明け話』(河出書房新社、平成六年十一月)所収七一頁参照)。
- (13) 中島河太郎『日本推理小説史 第一卷』(東京創元社、平成五年四月)「第十章 押川春浪の伝奇冒險小説」(宝石) 昭和三十七年九月)。
- (14) 伊藤秀雄『明治の探偵小説』(晶文社、昭和六十一年十月)。
- (15) 吉井勇『東京・京都・大阪 よき日古き日』(中央公論社、昭和二十九年十二月三版) 六三―四頁。なお、「海国少年」は東光館より発行、明治三十年一月創刊された雑誌。
- (16) 前掲、一一一―一三頁参照。ただ、横田順彌「明治時代は謎だらけ!! 海底軍艦の出現!!」(『日本古書通信』第八三九号、平成十一年六月)には、「この連載の『塔中の怪』は未見。」とある。
- (17) 茨城大学図書館、神奈川近代文学館、国立国会図書館、東京大学附属図書館など所蔵。
- (18) 前掲、二五九―二六〇頁。
- (19) 前掲、一二四頁。
- (20) たとえば、伊藤秀雄は、黒岩涙香の「真ッ暗」(明治二十二年八月九日―十月二十六日「絵人自由新聞」連載)が謎解きゲームを意図して訳述されていたことを指摘している。(前掲、六五―六頁参照)。
- (21) 川戸道昭「日本におけるシャーロック・ホームズへの「古典」化までの道すじ」(『日本におけるシャーロック・ホームズ』(ナダ出版センター、平成十三年九月)、二九頁参照)。
- (22) 前掲、八頁。
- (23) 伊藤秀雄、前掲一三七頁参照。

(24) 「不思議の探偵(一)」「毒蛇の秘密(八)」(「中央新聞」明治三十二年七月十九日、『明治期シャーロック・ホームズ翻訳集成』(ナタ出版センター、平成十三年一月)所収)。

(25) 「不思議の探偵(一)」「毒蛇の秘密(十)」(「中央新聞」明治三十二年七月二十一日、前掲所収)。

(26) 前掲、一五頁。

(27) 前掲。次のようにある。

僕は怪奇小説では「塔中の怪」というのを忘れることが出来ない(略)押川春浪は必ずしも冒険武俠のみの作家ではなかった。「銀山王」というのは涙香の探偵小説に類する作風であったし、「ホシナ大探偵」はドイルのシャーロック・ホームズの翻案であった。

(28) 『英雄 武俠の日本』(文武堂藏版、博文館・東京堂発兌、明治三十五年十二月)。

(29) 伊藤秀雄「解説」(『少年小説大系2巻 押川春浪集』(三一書房、昭和六十二年十月)所収四六〇頁)。

(30) 「黒面島」(二)『海国少年』三卷十一号、明治三十二年十一月)。

(31) 高橋修は「海国少年」の「発行の辞」とともに、「海底軍艦」に触れ、それらが「海国」という言説シフトの枠の中」にあると指摘し、それらが、三国干渉後のメディアの政治的な言説と連動している様子を示している。(高橋

修「ジャンルと様式―日清戦争前後―」(「日本近代文学」第五十集、日本近代文学会、平成六年五月)

(32) この「はしがき」に関して、横田順彌・會津信吾は、当時「浪漫詩」全盛時代であったことを説明し、春浪は「これら一連のロマンチック文学に反発を覚えながら」、「欧米の冒険小説の雄壮さ、おもしろさ」を「日本の文学界に移植しよう」とし、「しかも、できることなら、外国作品の翻訳ではなく、日本精神を加味した、独自の冒険小説として、生み出そうと努力していた」(前掲、一二四頁)と述べるが、ここでは、なぜ「一連のロマンチック文学に反発を覚え」たのか、また、この「はしがき」のどこから「日本精神を加味した」ということが読み取れるのか、その読みの理由は跡付けられてはいない。

(33) 無署名であるが、「幸徳秋水全集 三卷」(明治文献、昭和四十三年三月)によれば、幸徳秋水によるもの。

(34) 「黒面島」(二)『海国少年』三卷十一号、明治三十二年十一月)。

(たけだ・ゆき 本学博士後期課程)